



今こそ、実感のある英語教育を

桃木 暁子

日本では今、戦後何回目かの「英語ブーム」だという。文部科学省も「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（2013年12月13日公表）に基づいて「2014年度から逐次改革を推進」することになった。

そんななかで、わたし自身は、大学の英語教育にかかわって7年目になる。現在では、文系と理系の二つの大学で、大学院生と学部生を対象とした英語の授業を受け持っている。「最近の学生は英語ができないから、専門書を読めるように教えてほしい」と依頼されたのが最初だった。その後、毎年、さまざまな学生に教えながら、「最近の学生は英語ができない」の実態を目の当たりにしてきた。その現場での経験をふまえて、日本の学校における英語教育を考えてみたい。

多くの学生に共通の傾向は、「少しの会話ではできても、読み書き文法はできない」ことである。作文をさせると、動詞が二つある文や、品詞の区別のない文を作る。当然、意味は通じない。なぜそのような書いたか、と尋ねても、「なんとなく」という答えしか返ってこない。英語の基礎がよくわかっていないのである。だから、正確に読むことも困難である。これでは、どうみても、大学生以上の活動に不十分である。日本の将来を担う若者が、これでは困る。

なぜこのような事態になったのか。1970年代から推進されてきた「コミュニケーション重視」の英語教育の結果だろうか。それも含めてわたしが感じるのは、多くの教育現場で、「自分が英語を使う」という実感のない英語教育が行われてきたのだろう、ということである。だから、その英語が英語として機

能するかどうかは問題にされず、教育法も改善されてこなかったのではないか。

新しい「英語教育改革実施計画」をみると、これまでより到達目標レベルが一段階上がって、語学レベルの国際基準CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) でいえば、中学校でA1～A2 (初心者～初級)、高校でB1～B2 (中級の下～中級の上) と設定されている。この設定は妥当であろう。重要なのは、生徒たちをそのレベルに確実に到達させるために、どのような方法をとるかである。これまで、一つ下のレベルでさえ、到達させることができなかったことが問題だからである。

その原因が「実感のない英語教育」だったのであれば、「実感のある」英語教育にする必要がある。現在、多くの日本人が中級以上の英語を使う必要がありそうなのは、仕事の場であろう。コミュニケーションの相手は、英語ネイティブ話者ばかりではない。このような、「仕事の場での国際共通語としての英語」は実感のある目的になるだろう。目的が定めれば、あとは、それを達成するために有効な方法を現実的、理論的に選択し、実行すればよい。たとえば、ヨーロッパで実績のある、直接法（学習者の母語を介さずにその言語だけで教える）による言語教育プログラムは、大いに参考になるだろう。

ところで、英語教員の多くが指摘するのが、「英語ができない」の背景に「日本語ができない」があるのではないか、ということである。英語教育と並行して、日本語教育の強化も必要なのかもしれない。

(JASTJ理事)

CONTENTS

巻頭言	1
総会報告	2
科学ジャーナリスト賞2014	
贈呈式・選考経過	4
受賞者の言葉	6
講評「選考を終えて」	8

例会報告 (3月) 低線量被ばくの体への影響	10
例会報告 (4月) 秘密保護法	11
会員便り なぜ原発事故の被災地ツアーか	12
会員便り 学生たちと作った福島ドキュメンタリー	13
賛助会員のコーナー / WEB編集長から	14
事務局便り	16

設立20周年に向け活発に活動

JASTJは5月14日、日本記者クラブで2014年度の通常総会を開きました。正会員の出席者は20人で、欠席者のうち41人が議長に委任しました。なお、5月13日現在の正会員数は203人で、定足数はその5分の1の41人です。総会では、昨年度の活動内容と決算および監査結果、今年度の予算案などが報告されるとともに、新年度の活動方針などが提案され、全会一致で承認されました。決算報告書については、倉本昌昭監事と湯浅誠（カクタスコミュニケーションズ）監事に監査をしていただきました。

昨年度は、毎月の講演会や報告会、見学会、第9回科学ジャーナリスト賞の選考と表彰、第12回ジャーナリスト塾の実施など、例年どおり進めることができました。さらに、昨年6月にヘルシンキで開かれた第8回科学ジャーナリスト世界会議には会長など5人ものJASTJ会員が参加し、世界会議の成功に貢献しました。笹川平和財団の支援を受けたアジアの若手科学ジャーナリスト育成プロジェクト「SjCOOP Asia」の第一回東京会合も、好評のうちに終了することができました。また、元会長の小出五郎さんが死去され、3月22日にプレスセンターで「小出さんを語る会」を開催しました。ご冥福をお祈りいたします。

■20周年記念企画のため予備費を持ち越し

決算に関しては、事務所経費やホームページ管理費の削減、SjCOOP東京会合の支出が予算内で収まったことなどが寄与し、予備費に手をつけずに済みました。このため、昨年度の決算は94万円の黒字でした。

本会報に添付した決算報告書には、95,217円の赤字となっています。しかしこれは支出の中に、第一回東京会合で発生した費用の一部である1,368,000円を一時的に肩代わりしたためです。この肩代わり分は総会前日までに東京会合の予算からJASTJ会計に返却されています。また、収入の欄に33万円ほどありますが、これは東京会合予算から一時的に預かったお金で、東京会合経費として代行処理しました。このため実態は、-95,217+1,368,000-330,000円で、約94万円の黒字という結果です。

今年度はJASTJの創立20周年にあたり、このため各種の記念イベントが企画されています。今回の黒字の94万円は、そのままこの記念事業に使われることになります。また、今年9月には第二回東京会合を開催するということもあり、黒字だったことに慢心せず、さ

らなる経費削減の努力は進めたいと思います。

■活発だった各種活動

昨年度は例会として講演会や報告会、見学会を10回実施しました。福島第一原発事故や秘密保護法の問題を中心に、北極研究やリチウムイオン電池などに関する講演会を実施、国立科学博物館の特別展「深海」の見学会も開きました。

第9回のJASTJ賞では79の作品からOurPlanet-TVの「東電テレビ会議 49時間の記録」が大賞に選ばれました。NHKスペシャルの「いのちの記録」を未来へ震災ビッグデータ」と漫画家あさりよしとおさんの著書「宇宙へ行きたくて液体燃料ロケットをDIYしてみた～実録なつのロケット団」、元カリフォルニア工科大学地震研究所長の金森博雄さんの著書「巨大地震の科学と防災」の3作品が優秀賞に選ばれました。贈呈式では、花王、味の素、三菱電機、宝ホールディングスから副賞を提供していただきました。

これまでサイエンス映像学会の主催により関西学院大学丸の内キャンパスで開いていた「科学ジャーナリスト塾」は、原点に立ち返って発足時の形に戻し、白山事務所がある富山会館の会議室で再出発しました。ただ、事前の広報宣伝が不十分だったため参加者10人程度の少数での再開となりました。広報が不十分では「ジャーナリスト」の名前が泣きますので、今年度はもう少し広報に力を入れたいと思います。

■国際化対策

科学ジャーナリストの2年に1度の祭典「第8回科学ジャーナリスト世界会議」にはJASTJから5人の理事・会員が参加。また、この会議の会場で世界連盟の幹部とSjCOOPの第一回東京会合の打ち合わせもしました。この結果、昨年11月18日から22日、東京・六本木の政策研究大学院大学をメイン会場とした第一回東京会合が開かれました。インドネシア、ベトナム、カンボジア、カナダ、韓国などから23人のジャーナリストが来日。科学ジャーナリズムの課題やあり方などについて熱心な講演や討論が繰り広げられました。会合の報告書も製作されたので、詳しくはそちらをご覧ください。会合には「韓国科学ジャーナリスト協会」のメンバーも参加、2015年のソウルでの世界大会について意見を交換しました。また参加者たちは期間中、1泊2日の日程で東北地方の津波被災地を視察しました。

❖ 総会報告

2013年度 決算報告書 (2014年5月13日)

収入		支出	
前年度繰越金	¥2,258,507	月例会 (例会・親睦会)	¥387,084
会費収入	¥2,137,000	会議費 (理事会等)	¥78,690
賛助会員 (15社)	¥2,520,000	総会費 (会場費等)	¥10,500
雑収入	¥24,000	会報刊行費 (4回発行分・謝礼図書券)	¥579,445
内訳	¥10,240	通信費 (電話・ビジネスweb・会報郵送費)	¥182,016
会員外参加費	¥23,000	人件費 (事務局人件費)	¥628,680
書籍印税	¥327	事務費 (文具・web手数料・郵送料・OA機器等)	¥109,879
寄付 (贈呈式時)	¥330,000	事務所負担金	¥360,000
利息		HP作成・管理費	¥105,000
Sjcoop Asia 預かり金	¥330,000	税金	¥6,140
		科学ジャーナリスト塾サポート	¥1,050
		会費返金	¥64,000
		会費払い過ぎ会員への返金	¥64,000
		[経常経費小計]	¥2,512,484
		検証プロジェクト	¥2,080
		P国際化対応※1	世界連盟費・事務費
		P科学J賞準備運営	¥192,455
		Sjcoop Asia 立て替え金	人件費・会議・書籍・郵送・授賞式会場費
		[プロジェクト小計]	¥1,368,000
単年度収入計	¥5,044,567	単年度支出合計	¥2,627,300
総収入	¥7,303,074	収支	¥5,139,784
		次年度繰越金	¥-95,217
			¥2,163,290

*Sjcoop Asia 預かり金は14年度支払予定

*Sjcoop Asia 立て替え金¥1,368,000は14年度返済予定

2014年度の予算

収入		支出	
前年度繰越金	¥2,163,290	月例会	¥550,000
会費収入	¥2,000,000	会議費	¥100,000
賛助会員(14社)	¥2,400,000	総会費	¥15,000
入会：カクタス 退会：ノバルティス・三菱電機		会報刊行費	年4回(刊行・執筆謝礼)
雑収入	¥30,000	通信費	電話・会報郵送費
内訳	¥10,000	事務局人件費	¥660,000
会員外参加費		事務費	郵送・振込手数料・文具・OA機器など
寄付 (贈呈時)		事務所負担金	¥360,000
利息		HP維持・管理費	¥200,000
SjcoopAsia返済金	¥1,368,000	税金	¥50,000
		予備費	¥673,000
[会費・雑収入小計]		上記計	¥3,528,000
		検証プロジェクト	¥100,000
		P国際化対応※	世界連盟費・世界会議参加費補助
		P科学J賞準備運営	¥300,000
		科学J塾支援金	会場費・書籍・郵送・人件費など
		20周年記念会	¥50,000
		SjcoopAsia 支払金	会場費・講師・演奏者謝礼
		[プロジェクト小計]	¥400,000
単年度収入計	¥5,808,000	単年度支出合計	¥330,000
総収入	¥7,971,290	単年度収支	¥0
		次年度繰越金	¥2,163,290

*世界連盟費・世界連盟参加援助費・Sjcoop関連費用

■今年JASTJ設立20周年

JASTJは今年の7月で20歳です。このため7月1日、東京のプレスセンターで20周年記念イベント「科学とウィンナ・ワルツの夕べ」を開催します。東京ヨハン・ショトラウス・アンサンブルが演奏し、軽食とワインが提供されます。参加無料ですので、会員の方はふるって参加してください。

20周年記念出版の企画も進めています。理事や会員らが自らの失敗体験をもとに、科学ジャーナリズムのあるべき姿を探る「科学を伝える」(仮題)で、約15人のメンバーが執筆に取りかかっています。

■会員と賛助会員

会員数については現在、正会員が203人で賛助会員が14社です。昨年度は三菱電気が退会し、ノバルティスファーマが休会となる一方で、サントリーホールディングスとカクタス・コミュニケーションズが新たに入会しました。(事務局長 引野肇)

2014年度の理事 (担当) および監事

会 長	小出重幸
副会長	室山哲也 (企画)、高橋真理子 (国際)、滝順一 (科学J賞)
理 事	引野肇 (事務局長)、高木勲生 (会報編集長)
	飯島裕一 (地方)、漆原次郎 (WEB・検証P)、大江秀房 (出版、科学J塾)、隈本邦彦 (企画・検証P)、佐藤年緒 (企画・科学J塾)、柴田鉄治 (科学J賞・検証P・科学J塾)、瀬川至朗 (企画)、武部俊一 (科学J賞・出版)、田村真紀夫 (科学J賞)、西野博喜 (会報)、林勝彦 (科学J塾・科学J賞)、藤田貢崇 (事務局長補佐/WEB編集長・会報)、保坂直紀 (企画)、牧野賢治 (国際)、元村有希子 (企画・国際)、桃木暁子 (地方)、山本威一郎 (会報・企画・検証P・出版・科学J塾)、横山裕道 (企画・科学J賞)
監 事	倉本昌昭、湯浅誠 (カクタス・コミュニケーションズ)

大賞に「東電テレビ会議49時間の記録」の白石草氏 優秀賞はNHK作品など3件に

日本科学技術ジャーナリスト会議が優れた科学ジャーナリストの仕事や科学者たちの啓蒙活動などを顕彰する制度を設けてから今年で9年目。「科学ジャーナリスト賞2014」の贈呈式が5月14日、東京・内幸町のプレスセンター10階ホールで今年も華やかに、なごやかに、いつもながらのあたたかい雰囲気の中で行われた。

室山哲也理事の司会で始まった贈呈式は冒頭、柴田鉄治理事が選考経過を報告、つづいて受賞者への表彰に移った。

まず、選考委員の相澤益男氏が壇上に上がり、優秀賞に輝いたNHKスペシャル「“いのちの記録”を未来へ 震災ビッグデータ」の制作にあたったNHK報道番組センターのディレクター、阿部博史氏に、JASTJのロゴマーク入りのレリーフと協賛企業からの数々の副賞を手渡したあと、授賞理由を述べて祝福した。

次いで、選考委員の浅島誠氏からは同じく優秀賞に輝いた「宇宙へ行きたくて液体ロケットをDIYしてみた～実録なつのロケット団」の著者あさりよしとお氏に代わって学研教育出版の吉野敏弘さんに、

また選考委員の米沢富美子氏からは「巨大地震の科学と防災」の著作に対して米国在住の主著者の金森博雄氏に代わって共著者の瀬川茂子氏と林能成氏に、それぞれレリーフと副賞、さらに称賛と祝福の言葉が贈られた。

そのあと科学ジャーナリスト大賞の贈呈に移って、選考委員の村上陽一郎氏が「東電テレビ会議 49時間の記録」の制作に対して、OurPlanet-TV代表の白石草氏に大賞のレリーフと副賞を手渡し、選考理由を述べて称賛と祝福の言葉を贈った。

最後に、選考委員の白川英樹氏が全体を通じての総評を述べた。記念撮影のあと、出席者全員で乾杯して、くつろいだ雰囲気の中で受賞者のあいさつを聞いた。

この受賞者のあいさつが、いつものことながら感動的だった。個性あふれるその言葉からは、謙虚な姿勢の中にも作品にこめた努力と熱意が、ひしひしと伝わってきた。今年もまた科学ジャーナリスト賞を創ってよかったとつくづく感じさせてくれる瞬間でもあった。

(JASTJ理事 柴田鉄治)

科学ジャーナリスト賞 2014 受賞者一覧 (敬称略)

大賞	OurPlanet-TV 代表 白石 草 ●「東電テレビ会議 49時間の記録」の制作に対して
優秀賞	NHK報道局社会番組部 チーフ・プロデューサー 三村 忠史 ●NHKスペシャル「“いのちの記録”を未来へ 震災ビッグデータ」の番組に対して
	漫画家 あさりよしとお ●「宇宙へ行きたくて液体燃料ロケットをDIYしてみた～実録なつのロケット団」(学研教育出版)の著作に対して
	元カリフォルニア工科大学地震研究所長 金森 博雄 AERA 編集部編集委員 瀬川 茂子・関西大学社会安全学部准教授 林 能成 ●「巨大地震の科学と防災」(朝日新聞出版)の著作に対して

選考委員 (50音順、敬称略)

- 【外部委員】 相澤益男 (科学技術振興機構顧問)、浅島誠 (東京大学名誉教授、日本学術振興会理事)、白川英樹 (筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞者)、村上陽一郎 (東京大学名誉教授、国際基督教大学名誉教授)、米沢富美子 (慶応大学名誉教授)
- 【JASTJ委員】 柴田鉄治、滝順一、武部俊一、室山哲也、横山裕道 (小出五郎 1月逝去)

NPOの独立テレビの労作に高い評価

今年の応募作品は、新聞2、映像15、書籍54、展示4、WEB3、活動1の計79作品。昨年よりかなり増え、科学ジャーナリスト賞が社会に広く浸透してきたことを物語っている。

11候補が最終選考に

例年通り全応募作品を少なくとも3人以上のJASTJ会員が評価する予備選考を経て、3月21日の第1次選考委員会で最終審査にかけられる11作品を選んだ。映像3、書籍8で、その作品名は別掲の通りである。新聞はこの段階で消えた。

最終選考委員会は4月19日に開かれた。今年も選考を効率的におこなうため、昨年同様あらかじめ5段階評価で採点し、その集計結果を手にしながら議論を進めた。採点の結果はかなり評価が割れていたため、絞るのに難航するのではないかと心配したが、幸い熱のこもった論議によって比較的すんなりと決まった。

大賞に選ばれた「東電テレビ会議

49時間の記録」は、NPOの独立テレビが制作した異色の作品で、見ているだけでも疲れてしまうような労作だが、原発事故を検証するための貴重な資料であり、大手のテレビ局がやらなかった作業を立派にやり遂げたという点も高く評価された。

優秀賞のNHKスペシャル「“いのちの記録”を未来へ 震災ビッグデータ」は、携帯電話やカーナビの普及でこんなことまで分かるような時代になったのかという驚きと、将来、防災などに役立つことへ期待が、そのまま高い評価につながった。

同じく優秀賞の書籍「宇宙へ行きたくて液体燃料ロケットをDIYしてみた～実録なつのロケット団」

は、従来の授賞作品とは全く違った楽しい本である。科学技術は夢を追って発展してきたことを考えると、科学の夢と楽しさを多くの人たちに伝えることも大事なことだと、授賞作品に選ばれた。

作品の作り方も評価対象に

同じく優秀賞の「巨大地震の科学と防災」は、地震学の泰斗、金森博雄博士の自伝的な要素を加味して地震学の到達したところを分かりやすく説いた本。その内容も素晴らしいが、文章が苦手な科学者に科学ジャーナリストが手を貸して仕上げるという成功例の一つとしても高く評価された。この方式が

広がれば日本にも優れた啓発書がもっと出てくるだろうという期待も込められている。

今年の選考では、当初から対象に挙げていながら応募がなかった展示活動にも広げようという努力をした。今回初めて応募作品はあったが、残念ながら最終選考には残らなかった。展示期間が過ぎてしまう

と、あとでの評価が難しいといった問題点をどう乗り越えるか、今後の検討課題として考えていきたい。

(JASTJ理事 柴田鉄治)



受賞者が選考委員とともに記念撮影（前列左から受賞者の林、瀬川、白石、阿部、吉野の各氏、後列左の3人目から順に外部選考委員の浅島、米沢、白川、相澤、村上の各氏）（撮影 高木勲生）

一次選考通過作品（受賞作は除く）

【映像】NHKスペシャル「汚染水～福島原発事故の真相」（鈴木章雄・松岡大介：NHK）

【書籍】「医学的根拠とは何か」（津田敏秀：岩波書店）／「原発と活断層－『想定外』は許されない」（鈴木康弘：岩波書店）／「スズメつかず・はなれず・2千年」（三上修：岩波書店）／「鳥類学者 無謀にも恐竜を語る」（川上和人：技術評論社）／「日米同盟と原発 隠された核の戦後史」（中日新聞社会部：東京新聞）／「メディアを読み解く力」（小島正美：エネルギーフォーラム）（敬称略）

情報は誰のものか

OurPlanet-TV 代表理事 白石草さん

「本店！本店！大変です！3号機が爆発しました！」

故吉田昌郎元所長の緊迫した声を覚えている人は多いだろう。今回、大賞をいただいた「東電テレビ会議～49時間の記録」は、東京電力がインターネット上で公開している動画のフッター（未編集の映像）を、OurPlanet-TVが独自編集したものである。

映像は、福島オフサイトセンター、東電本店、福島第一原発、福島第二原発、柏崎刈羽原発を結ぶテレビ会議の分割画面のみ。しかし、3号機の原子炉压力容器の圧力が異常上昇し、作業員が避難せざるを得なくなる様子や2号機がドライベントを迫られながら、打つ手打つ手がことごとく失敗していく様子が生々しく記録されている。

被災者に見せたい！

東京電力がテレビ会議の映像を公開した2012年8月。私は東電本店の一室で、この映像に釘づけになった。当時、あれほど否定されていた炉心溶融が、実際には刻々とカウントダウンされていたからである。バッテリー、ガソリン、水、食糧が次々と不足し、物資の調達に行き詰まる様子は、まるで補給を失った太平洋戦争の南方戦線を思わせた。事故で生



選考委員の村上陽一郎さんから祝福される白石さん
(撮影 高木勲生)

活が一変してしまった被災者に、この映像を見せたい。その時、私は強く感じた。

朝日新聞のキャンペーン報道などによって公開に至ったものの、マスコミ関係者に限定され、映像は厳しく管理されていた。持ち出すことも、録音すること

も許されず、監視カメラのある視聴室に入室する際には、同意書へサインしなければならない。テレビ局のリクエストによって、映像の一部が徐々にインターネットで公開されるようになったが、その映像は200本にも細



JASTJ大賞を受賞した白石草さん
(撮影 高木勲生)

かく分割され、一般市民が全体像を理解するのは困難な状態だった。

今回の映像は、こうして公開された一部の映像を、時系列にわかりやすく編集しただけのものである。現場の臨場感を優先させるために、いっさいの演出を放棄した。字幕スーパーによって技術用語や時間を補足しているものの、ピーといった音やぼかしも入ったまま。あまりにも実験的な映像となったため、完成当初は、劇場で公開して大丈夫なのかという不安があった。

想像を上回る観客の反応

ところが、実際に上映してみると、観客の反応は想像を上回るものだった。福島では会場から度々大きなため息が漏れ、時には嗚咽や舌打ちが聞かれた。上越では上映後、柏崎刈羽で事故が起きた際にどう避難すべきか、真剣に議論する人たちの姿があった。観客は映像が刻む時間を再びなぞりながら、それぞれの視点で事故の解釈をし、検証しているのだ。事故の過酷さを初めて理解したという声も多い。

私たちOurPlanet-TVは、フルタイムスタッフがわずか3人の小さなメディアだ。あまりにマイナーなため、政治家や官僚や著名な専門家から見るときわめて利用価値は低く、取材する際の扱いは一般市民と同じ。常に冷遇されている。逆に言えば、特権的な立場にないからこそ、接した情報を一つひとつムダにせず、丁寧に紐解くしか術がない。このことが、今回の仕事に結びついたのかもしれない。

情報は誰のためにあるのか。原発事故が日本社会に突きつけたこの課題を、この映像を通して、多くの人に共有していただければ幸いである。

ビッグデータがとらえた“いのちの記録”伝えたい

NHK 報道局社会番組部チーフ・プロデューサー 三村忠史さん

NHKスペシャル「いのちの記録」を未来へ 震災ビッグデータ」は、東日本大震災から2年のタイミングで放送されました。企画のきっかけとなったのは、大学院で宇宙物理学を専攻したディレクターが、震災時に蓄積された膨大な電子データを利用した防災番組を構想したことでした。一方で、同じころ大手IT企業の呼びかけで、企業や団体が所有するビッグデータを持ち寄り分析するワークショップが開かれるなど、東日本大震災の教訓を新たな手法で次世代に残す模索が始まっていました。

私は、震災のちょうど一年前、津波の脅威を世界の最新研究から明らかにするNHKスペシャルを制作した経験がありました。その取材の過程で研究者の方々が口にしたのが「大津波は100年200年のタイミングでしかおきない。そのため人々はその脅威を忘却してしまう。津波防災は忘却との闘いでもある」という言葉でした。日本人は太古から、大津波の脅威を石碑などに刻み後世に伝えようとしてきました。東日本大震災では、津波の複雑な挙動や想定を

超える被害像が膨大な映像で記録されました。しかし、カメラのフレームにはおさまらなかった“いのちの記録”もあらゆる手段で浮かび上がらせ、後世に伝えていくべきではないのか。前述のディレクターに企画の相談を受けたとき、真っ先に浮かんだのはそのことでした。

NHKスペシャル「震災ビッグデータ」はその後、File 2、File 3と回を重ねて放送しています。スタッフに共通するのは、これらの知見が、次の災害時に一人でも多くの命を救うことにつながればという思いです。他のあらゆる防災手段と同じように、ビッグデータが万能ではないのは当然です。しかし、ビッグデータから導き出された“いのちの記録”が、忘却に抗う現代の“石碑”になることを願い、番組を制作し続けたいと思っています。



(提供 筆者)

やらない理由は無いという事で、始めてみました

漫画家 あさりよしとおさん

なぜ、いつまでたっても一般人が宇宙へ行ける見通しが立たないのか。そんな話は四半世紀も前から、仲間内の酒の席で語られておりました。国産の大型ロケットが誕生してからは、日本独自の有人宇宙船を作るべきと、周辺から焚きつけたり、宇宙開発の現場を影響力の限り紹介したり、一般の関心を集めようと画策したのですが、なかなか最終目的に近づく気配はありませんでした。

そんな中、ビジネスとしての民間主導の有人宇宙旅行という話が身近な所で持ち上がったものの、それは紆余曲折の末に潰え、計画は白紙に戻ってしまったのですが、一度目の前にちらついた具体的なビジョンは、そう簡単には忘れられません。この状態で「これは、自分たちで、出来るところまで作ってみないか？」という話になれば、それをやらない理由は見つかりません。

とは言え、有人宇宙船打上げが可能なロケットをいきなり作れるとまでは思い上がりではありません。

とりあえず何から始めようかと考えた時、拙作の、小学生が人工衛星を打ち上げてしまう漫画が浮上りました。川端裕人さんの小説に触発されて描いた、そのジュブナイル漫画を出発点とする、ミニ

ママな人工衛星打上げロケットなら、漫画の内容の通り、我々一般人の手でも開発は可能なのではないか？ そう思い込めたら、もう止まるわけありません。そう時を経ずに、拙宅（借家）の台所で、実験用ロケットエンジンは産声を上げました。その試行錯誤は、我々にとって面白いことこの上無かったです。果たして他の人間から見たら、どうなのか？ とは少々気になっていました。この度の、慮外の受賞におどろくと同時に「ああ、やっていて良かったんだな」と、胸をなで下ろしている所です。



(提供 筆者)

研究を災害軽減に役立てたい

米カリフォルニア工科大学名誉教授、元 同地震研究所長 金森博雄さん

このたびは、私たちの著書『巨大地震の科学と防災』について、思いもかけず科学ジャーナリスト賞をアエラの瀬川茂子編集委員、関西大学の林能成准教授とともに受賞することになり、大変光栄に存じます。

私は、自然のはたらきに魅せられ、地震や火山の物理に興味を抱き、物理や数学の道具を使って、興味深い自然現象を解き明かすことに喜びを感じてきました。不幸にして、地震は我々の社会に多大な災害をもたらします。科学技術のすばらしい発展の恩恵を受ける一方で、自然災害のインパクトは、現代の高度に発展した社会において益々深刻になりつつあり、その効果的な軽減策は今日の重要な課題であります。

多くの地震学者と同様、私は研究成果が災害軽減に役立つことを願い、そのためには研究成果を正しく一般社会に伝えることが極めて重要と思っています。しかし、私のように、ほとんどの研究活動を大

学で過ごしたものとって、それがたいへん難しいことを痛感していました。今回、瀬川さん、林さんとの共同作業により社会との接点を得ることができ、私自身多くの教訓を得ることができました。

この本は私のインタビューを文章にして、それに手を入れる形でできあがりました。地震波を解析して、地下で何が起きているのか突き止めようとしてきた個人的な研究史を振り返りながら、防災に役立てる方法についても考えました。

選考委員の諸先生方がこのことの重要性を認識して私たちの著書を評価してくださったのであれば、選考委員会こそこの賞に値するものと思います。どうも有り難うございました。



(提供 筆者)

講評 選考を終えて ジャンル別の公募・選考も今後の課題に

白川英樹さん

毎年のことですが、今年も簡単には決まりませんでした。時間通りに終わるのか心配になるほど長い時間をかけた討論の結果、素晴らしい受賞者に恵まれました。受賞者の方々には改めてお祝い申し上げます。

科学ジャーナリスト賞は「科学技術に関する報道や出版、映像などで優れた成果をあげた人を表彰する」ことになっていますが、たったひとりで書いた著書もあるし、NHKスペシャルのように大勢の人と



JASTJ賞2014の選考について全体講評する白川英樹さん (撮影 高木毅生)

お金をかけた映像作品もあります。これらを同列に評価するのはとても困難なことです。優れた啓発書を著した科学者や科学技術コミュニケーターなども対象に入れるとなおさらです。

選考委員は外部委員5名とJASTJ内部委員5

名で構成されています。外部委員は大学の元教授でかつては研究者だったのに対して、内部委員はプロの科学ジャーナリストです。外部委員にしる、内部委員にしる、個々の選考委員の作品を見る目が違うのは当然ですが、プロの科学ジャーナリストと科学者の作品に対する評価の違いもかなりなものです。

異なる二つのグループにより選ばれたという点で受賞作品はそれぞれに素晴らしいものですが、別な見方をすれば10名による評価の平均化のために、万人受けのするごく平凡な受賞作品が選ばれる弊害があるかも知れないという危惧もあります。

そこで、今後の期待と提案です。今までも書籍、新聞、映像、WEB、その他などジャンルを考慮して選考しているのですが、いっそのことジャンル別に応募していただき、それぞれのジャンルで科学ジャーナリスト賞を一つ選考し、選考された中から大賞を決めるというような応募、選考の仕方があってよいのではないのでしょうか。今後も優秀な作品が応募されるように、活発な応募、推薦を期待しています。

(筑波大学名誉教授、ノーベル化学賞受賞者)

ビッグデータといのちの軌跡

相澤益男さん

なぜ、東日本大震災による人的被害がこれほど大規模になったのか。「震災ビッグデータ」は、携帯やカーナビの全地球測位システム(GPS)に記録されていた膨大な位置情報と地震・津波情報を統合的に活用し、3・11の人と車の動きを可視化した。そこに描き出された人の流れは、「いのちの記録」そのものだ。選考委員からは、「目から鱗」「新しいタイプのドキュメンタリー」と高く評価された。



目を疑ったのは、いったん避難したにもかかわらず、V字ターンで津波浸水域に引き返しての被災。いのちの軌跡が、そこそこで数多くプツンと途切れている。さらに息をのむ驚きは、地震発生後30分で車の流れがグリッド状に大渋滞、そこに津波が押し寄せた悲劇だ。せめてもの救いは、世界に飛び交う1億8千万件のツイッターでのつぶやきから、気仙沼の障害児施設の避難者全員が救出されたこと。人的災害ゼロを目指し、ビッグデータをどう活かすか、大きな課題が提示された。

(科学技術振興機構顧問、東京工業大学名誉教授・元学長)

映像編集で圧倒的な訴求力

村上陽一郎さん

原発事故に関する言説も全体的に幾分落ち着いてきた感があるが、大賞の映像作品「東電テレビ会議」は原資料(書物)をまとめた記者の努力もさることながら、映像化に当たっての編集の結果、訴求力は圧倒的だった。良くも悪くも現場の姿を克明に伝える迫真性があった。NHKの「震災ビッグデータ」と最後まで競ったが、僅差で大賞に決まったことを喜ぶ。私は小島氏の「メディアを読み解く力」に大変感心した。原発問題をはじめ、メディアの報道姿勢に多くの問題点があることは誰もが感じているが、自身メディアのなかにながら、綿密にその「偏り」振りを検証、批判するのは難しい作業だったに違いない。三上氏の「スズメ」は、読み物としてとても好ましい印象を持ったが、科学の立場で解明されていない、という記述が多かったことが不利になったようだ。「宇宙ロケット」の話は、御本人たちの熱狂ぶりがアピールしたと思われるが、私としては「科学ジャーナリスト賞」の授賞に多少の違和を残している。



(東京大学名誉教授、国際基督教大学名誉教授)

子供心と“物づくり”

浅島誠さん

「実録なつのロケット団」に見えてくるものは、子供心にもった宇宙に行きたいと思う憧憬と、まったく分野の異なる大人たちが童心に戻って本気で液体燃料ロケットの打ち上げを試みた“物づくり”である。2004年に専門家、素人など有志が集まり、超小型の有人宇宙船+打ち上げ用ロケットをめざして「なつのロケット団」が始まる。これは国家に対抗して、民間の力でやろうとするため、次々に失敗と成功を繰り返し、悪戦苦闘しながらもめげずに失敗を分析、改良していく力はすごい。



その後、「なつのロケット団」は先行する北大・「植松電気」グループとの共同研究で、2011年12月に3号機で高度1000mに達した。第一関門突破の成功である。著者あさりよしとお氏の「ロケット作りは難しい、でも苦しくはない。ロケット作りは楽ではない。でもロケット作りはとても楽しい」の言葉の中に色々な出来事がつまっている。

(東京大学名誉教授、日本学術振興会理事)

地震学と防災がわかりやすく

米沢富美子さん

金森博雄氏は1936年生まれの地震学の泰斗で、早い時期に米国に渡り、そこで研究生活を送ってきた「地震学の草分け」のひとりである。その金森氏を、科学記者と理系研究者がインタビューして文章に仕上げたのが、「巨大地震の科学と防災」である。



本書を読むと、「偉大な地震学者の歩み」と「地震学の発展の様子」が手に取るようにわかる。地震学がどのような形で発展してきたか、そのなかで著者の金森氏らがどのような役割を果たしてきたのか、分かりやすい文章で綴られている。防災に関しても、「科学的にわかること、わからないことをはっきりさせて、社会に役立てられる部分をきちんと使っていけばいい」という著者の主張は非常に明瞭だ。

本書では、構成者の力量がよく生かされている。文章も、科学記者と若い科学者が協力して書いたものなので、こなれていて流れもスムーズで読みやすい。聞き取りでよくこれだけ専門的な内容をまとめあげたものだと感心する。

(慶応大学名誉教授)

低線量被ばくと体への影響

高木学校被ばく問題研究の実質的リーダー 崎山比早子博士に聞く

この3月に核戦争防止国際医師会議ドイツ支部主催で放射線の人体に与える影響を科学的・医学的に検討する専門家会議が開催されたが、3月31日の例会ではその会議で招待講演をして帰国したばかりの崎山比早子博士に低線量被ばくの体への影響について聞いた。

放射線の影響とがん

放射線によるがん化のしくみから話は始まった。がんの始まりは、細胞の中にある生命の設計図であるDNAに損傷が起こることにある。ヒトの体は60兆個の細胞からできているが、全身に1年間1mSvの放射線を浴びるとすべての細胞の核に放射線が1本通過する計算になるという。

この放射線は直接DNAを損傷するとは限らないが、間接的にもDNAに損傷を起こす可能性がある。しかし、損傷を受けたDNAには修復メカニズムが働くほか、がん化した細胞も監視機構によって排除されることが知られている。「放射線が当たる＝細胞のがん化」という単純な構図ではない。

急性障害の例として、1999年の東海村JCO臨界事故で亡くなった大内さんの例をあげた。被ばく直後は日焼け程度に見えるが、26日後には皮膚が脱落しだしている。これは表皮幹細胞のDNAがダメージを受けたために細胞分裂が阻害され、表皮の細胞が正常に供給されなくなったためだ。同種の変化が全身に起きて死亡した。

放射線ががんの原因になるか否かを知る方法の一つが疫学調査だ。もっとも信頼されている調査の一つは、53年間にわたって8万7千人を追跡調査した原爆被ばく者の寿命調査である。ICRPはこのデータ



電力業界とICRPの癒着についても指摘した崎山さん (撮影 西野博喜)

と基礎的実験から低線量の影響を推定する“しきい値なし直線(LNT)モデル”を採用している。しかし、広島・長崎の被ばくは一瞬で全量の放射線をあびる高線量率被ばく。ICRPは「ゆっくり浴びた場合(低線量率)は、DNA修復の時間が



低線量被ばくの話に聞き入る参加者たち

(撮影 西野博喜)

あるのでリスクは下がる」という考えからリスクを原爆被爆者の1/2に見積もっているので推定値に2倍の差がある。WHOや欧州放射線リスク委員会(ECRR)は1としているので日本政府が採用しているICRPの推定値は過小評価した値になる。

国会事故調が明らかにしたこと

崎山さんは、元国会事故調査委員会委員でもある。電気事業者連合(電事連)の内部資料調査から明らかになったこととして、電事連とICRP委員の癒着という問題点を指摘した。電事連が旅費等を負担することで、防護や管理が緩和される恐れがあるという。「電力産業として、ICRPがゆるい勧告をだせば原発の運営は楽になる」からだ。また、東電副会長の「悪い研究者にのっとられて悪い方向に向かわないように、研究の動向を監視しておくこと」という発言をとりあげ、電事連が研究に対しても監視している可能性を指摘した。

「市民科学者は、専門家しか知らないことを一般の人に知らせる架け橋になるのが役割」という思いが強く伝わる講演会だった。質疑応答では、反原発という立場を明言し、ふるさとに帰りたい気持ちはわかるが、高線量地域では線量限度を上げて住民を戻すことより、「そのお金で、家族ぐるみ安全なところへ避難させる方が良い」と提案をした。

事故後、私自身、福島に住んで「数値を並べられても私たちには判断できない」という県民の声も聞いた。先端技術は専門家の間でも意見がわかる。非専門家が求めているのは、専門家の間でどのような意見があり、なぜ妥協策に至ったのかなどへの丁寧な説明ではないだろうか。

(科学ジャーナリスト塾 塾生 JASTJ会員 都丸亜希子)

特定秘密情報保護法について

中村多美子弁護士

2014年12月までに施行される「特定秘密情報保護法」（秘密保護法）をテーマに4月25日、中村多美子弁護士を東京・内幸町の日本プレスセンターに招いて開いた。山中真人弁護士を招いた2月例会に続き、秘密保護法に関する2回目の勉強会。この法律の対象となる公文書とは何か、この法律の問題点、同法の役割と課題などを話し合った。

議会制民主主義に大きな障害

中村さんは、「秘密適応範囲が不明確」「行政官が不当に隠した際の罰則もない」「一方で、知る権利を担保した法律がない」など、問題点満載の状況で施行にむけてひた走っていると指摘。市民の情報へのアクセス、意思決定プロセスへの参加、司法にアクセスする権利を保障する「オース条約」の方向とは大きく違っていて、議会制民主主義を進める上では大きな障害になり得る、との危惧を語った。

この問題を考える手がかりとして、各国の同種の法律施行状況を紹介。米国では、国家機密の漏洩が外交交渉、防衛力維持に大きな不利益をもたらすとして、防諜法などの個別法によって国家機密の指定と解除を規定。ドイツやフランスも、同じく刑法などの個別法により反逆的秘漏出などを処罰対象にしている。

一方で英国では、1989年に起源を持つ国家機密保護法が、幾度かの改訂を受けながら継続し、無実立証責任を個人に課すなど厳しい内容。しかも、報道機関との紳士協定で政府が機密報道を差し止めることができる「DA通告制度」など、国防・外交への保護を優先した制度があることも紹介。各国に試行錯誤があり、日本も不合理な点を順次改訂して行く

努力が欠かせない、とした。

ところが、従来の情報三法、行政機関が持つ個人情報の保護に関して定めた、「個人情報保護法」、行政機関の公開に関する「情報公開法」、公文書の保存と管理を定めた「公文書管理法」と、新たに制定された秘密保護法の係り結びが複雑化していることを説明した。

まず、公文書管理法で公開を踏まえた管理・保管義務を定めても、これが秘密保護法により秘密指定されてしまうと、公開されない文書になってしまう。この際どの文書が「秘密指定」かが分からないことが、最大の問題だという。

取材活動自体が犯罪に？

特に科学や技術にかかわる情報は多岐にわたり、取材している最先端技術がいつの間にか秘密指定されていて、気付かずに記事化すると「それで、御用」となる混乱が、容易に想定できる。加えて原子力行政でも、福島原発事故など事故情報、安全審査情報の秘匿など、自主・民主・公開の原則、アカウントビリティが全く担保されていない現実がある。特に放射性物質の拡散方向を予測する「SPEEDI」情報などが秘密指定を受けた場合は、メディアはどうするのかなど、極めて多くの課題をかかえていることを指摘した。

さらに、何が秘密か明確にならない状況下でアクセスすると、その行為自身が犯罪になりかねない、という困ったことが現実になる、これが新法の最大の問題点だと締めくくった。これを受けての討論も1時間余続いた。

公文書として存在し、奥深くにある秘密にアクセスしたがるのは、弁護士とジャーナリストくらい。結局、勇気あるジャーナリストが秘密情報を掘り起こして報道し、それが違法と訴追されて裁判になり、国と正面から争う、このような過酷なプロセスを経てしか、同法を適切に改訂する手段はないのではないか——こうした暗澹たる見通しが示された。

(JASTJ会長 小出重幸)



秘密保護法の問題点を指摘した中村弁護士 (撮影 高木勲生)



科学報道との関係についても質疑応答が

(撮影 高木勲生)

なぜ福島原発事故の被災地ツアーを企画したか

福島第一原発事故が起きてからすでに3年以上が経過。事故発生当時と比べ報道は減少し、世間の注目度がかかり落ちていることを改めて実感している。旅行会社に勤務しながらJASTJに会員として参加している者として、事故がそのまま風化しないために何ができるのかを自問してきた。その中で、昨夏から同志を募り、草の根的に情報発信や事故の経験を風化させない工夫に取り組み、被災者との対話を繰り返してきた。

フィールドワークの重要性

事故の経験が風化の恐れにさらされていることは、新聞やテレビなどマスメディアでの露出数を見れば明らかである。人道支援や救済施策などに関する東電のその後の対応や、高濃度汚染水処理問題の動向、除染の進行具合などどれをとっても同様で、事故の実態や深刻な被害の影響がそのまま闇に葬りさらされる危険性すら感じる。

こうした社会情勢では、本当の事実や埋もれた情報をつかむことはとうてい不可能だろう。私自身も被災者の心情に配慮して、震災直後はあえて被災地視察などのツアーの企画は積極的にはしなかった。



南相馬市小高区の街は今も時間が止まったまま（今年3月の福島ヒューマンツーリズムで）



ミールヌイ氏らとの意見交換会（昨年11月のチェルノブイリツアーで）

しかし、個人的に福島復興に携わるうちに、被災現場と首都圏などそれ以外の地域との温度差を痛感した。

旅行会社の強みを生かして対話型ツアーの企画・実施に踏み込んだのは、その温度差を少しでも解消しようと思ったからだ。後に「ヒューマンツーリズム」と名付けたツアーである。参加者と



作家でチェルノブイリ観光プランナーのセルゲイ・ミールヌイ氏（左）らと筆者（昨年8月のチェルノブイリツアーで）

被災者の対話を通じて、課題抽出と可能な限りの解決に向けた糸口を探る議論を交わす。民間レベルで、様々なカテゴリーの人々と双方向のコミュニケーションをとりながら進めている。さまざまなカテゴリーの人々とは、大学生、一般社会人、ジャーナリスト、学術研究者、有識者などだ。

今春実施したツアーは一般参加者25人で、このうち10人は大学生だった。視察先は富岡町から避難してきた被災者が住む三春町仮設住宅、有機農家として東和町うきの里、風評被害を受けた伊達市霊山、そして沿岸部の相双地区（南相馬市小高区や相馬市松川浦など）を巡った。最後の相馬基地で、地元NPO代表とディスカッションする形で振り返りワークを実施した。参加者は終了後も興奮冷めやらず、次の新たなテーマに向けて再会を誓いあった。

風化させない環境作りを

昨年夏以降はチェルノブイリツアーを2回、福島ヒューマンツーリズムツアーを5回実施した。いま改めて思うことは、さまざまなカテゴリーの人々に一筋縄ではいけない社会問題を考えてもらう機会の創出と、事故を風化させない環境づくりを行うことの重要性だ。マスメディアに頼らない「百聞は一見に如かず」意識で、自身を含めメディアリテラシーを培うことを今後も続けていきたいと思っている。（JASTJ会員、JTBコーポレートセールスソーシャルソリューション地域交流推進局マネージャー 田中慶一）

「写真はいずれも筆者提供」

学生たちと作った福島ドキュメンタリー

「汚染水は完全にコントロールされている」「原発は安い」「日本は世界一厳しい安全基準」「100mSv以下ならば人体に影響は無い。ICRP（国際放射線防護委員会）も言っている」——。これらの誤った情報を学生たちは信じていた。映像作品を制作するまでは…。

その作品とは「学生たちが見た福島原発問題」。私が監督・制作したドキュメンタリー映画「いのち～From Fukushima to Our Future Generations～」の第2作目だ。学生たちとの協同で、この映画は完成した。企画は授業内のコンペで学生たちも投票して決める。彼らは早稲田大学大学院ジャーナリズムコースの「科学映像制作演習」、武蔵野美術大学映像学科の「ディレクター演習」、東京工科大学メディア学部の「ビデオ制作」受講者である。4～5人で1チームを編成、半年で完成する。1年で10本を超えるその作品の中から5本を厳選、オムニバス形式の1つの作品にした。

5話のオムニバスで真実に迫る

オムニバスの1話目は「3・11官邸の記録～福山ノートから紐解く～」。当時、内閣官房副長官だった福山哲郎議員が原発震災をリアルタイムで走り書きしたノートを基に構成した。最悪の場合「原発連続爆発・メルトスルー」の放射能惨事により東京都民も含む5千万人が避難する恐れがあった。その緊迫感をノートが伝えてくれる。



月から見た地球（NASA）と小池邦夫氏の書「いのち」を組み合わせた作品タイトル（提供 林勝彦）

2話目は「チェルノブイリと福島原発～HRNによる1mSvの訴え」。HRNは国際人権

NGOの“Human Rights Now”のことで。世界各国が受け入れているICRPの「LNTモデル」により、日本国は通常1mSvを年間許容限度としている。それらの知識をもとに2国間で避難と補償条件の違いを徹底比較、日本の方が住民に不利であることをファクトで示した。この作品はサイエンス映像学会で発表、高い評価を得た。

3話目は「福島というだけで～会津地区の風評被害」。5mSvで小児白血病、34mSvで肺がん死に有意差との医学的データがあるが、会津地区の線量は十分に低い。しかし、風評被害に悩む酪農家、旅館業の人たちの声を丹念に拾い、その実態を描いた。会津出身のディレクターほか4人全員が自費で1泊2日のロケを行っている。

4話目は「河野太郎・ごまめの歯ぎしり」。河野議員は1998年から核燃料サイクルに反対をと立て、3・11以降「原発ゼロの会」を立ち上げた。河野氏の人物評を神奈川県地元住民、金子勝教授、阿部知子議員らに聞いたが、その率直な感想が面白い。自民党で孤軍奮闘する河野議員と関係者に密着取材したドキュメンタリーである。

最後の第5話は「馬淵澄男の憤りと覚悟」。現在アウトオブコントロール状態にある汚染水問題を誰よりも憤っているのが、当時首相補佐官であった馬淵議員である。もし、2年半前に責任者として提言した「粘土方式」を実施していれば、汚染水問題は解決済みであると証言した。

学生が流す喜びの涙

学生たちは徹夜で作品を完成させる。最終日の発表会では、毎年泣く学生が出る。学内一の厳しい授業に耐え、チームワークで作品を生み出した喜びの涙である。私にとってもうれしいひとときとなる。

私は論文を書かない。作品そのものが私の論文。真剣勝負で学生と向き合い、完成した作品は私にとっても小さいいのち。この小さいいのちをベースに完成したのが今回の映画である。

今年も新学期が始まった。若い世代の人たちが将来世代のいのちを見据えて、新鮮な映像作品を創造してくれることを願っている。

（JASTJ理事 林勝彦）



作品を完成した東京工科大学の学生たち。中央右が筆者（提供 林勝彦）

日本の研究者を元気にしたい

サイエンス・コミュニケーションの重要性が高まる中、今や企業が自ら科学技術ジャーナリズムを学ぶべき時代です。カクタス・コミュニケーションズ株式会社は、2002年の創業から研究者のための学術コミュニケーション支援企業として、メインブランドのサービス「エディテージ」で投稿論文の英文校正・翻訳や学会誌の編集・出版サポートを提供してきました。しかし、近年の日本の研究力の伸び悩みや、研究者が抱える問題などを聞くにつれ、我々のような学術サポート企業が発信元となって、学術および科学技術の価値と重要性を世間に伝えていく必要性を今、強く感じています。そのため、今回 JASTJ の賛助会員として活動に参加させていただきました。

カクタスはいかに研究成果の価値を効率的に世界に流通させるかという課題に取り組んでいます。ここ数年はサービスの提供にとどまらず、研

究者コミュニティに向けた論文出版倫理についての啓発活動や、学術業界の最新動向についての情報共有などを積極的に行っています。2013年より社会貢献の一貫として、サイエンストークス(www.sciencetalks.org)という新しい科学メディアを立ち上げ、「日本の研究者を元気にする」というスローガンで、研究者と政策の専門家、企業と市民が一緒になって科学を面白くするためのトークイベントやシンポジウム、インタビュー等のコンテンツを提供しています。

科学技術の価値が問われ、科学の社会的説明責任が求められている今、JASTJがこの問題に果たす役割は非常に大きいと感じています。多くの先達の皆様からのご支援をいただきながら、企業としてこの分野でできる貢献を模索していきたいと願っております。

(カクタス・コミュニケーションズ 代表 湯浅誠)

WEB編集長から

会員専用のメーリングリストに流される情報が少しずつ増えてきました。個人会員だけでなく、賛助会員の方々も積極的にご活用ください。事務局に届いた外部からのイベント案内などのメールも、このメーリングリストを通じてお知らせしています。これまでも使用法などについて JASTJ News でお知らせしてきましたが、改めてご紹介いたします。

■ 会員専用メーリングリストとは

JASTJ 会員間での情報交換などに活用していただくために、メーリングリスト（以下、会員向けメーリングリスト）を開設しています。メールアドレスは kaiin-jastj@jastj.jp です。個人会員・賛助会員を問わず、事務局に登録しているアドレスをメーリングリストに登録しています。会員向けメーリングリストには登録されたメールアドレスからでなければ投稿できない仕組みになっています。別のメールアドレスを登録したい場合は、遠慮なくお申し出ください。いくつでも登録できます。

会員向けメーリングリストに投稿する情報は、①イベントの案内、②求人情報、③その他会員に広く周知したいこと、などです。投稿する際には、発信者となる会

員の氏名と、問い合わせ先が明記されているか、ご確認ください。会員向けメーリングリストに投稿されたメールは、件名の先頭に [kaiin-jastj] と記されています。

迷惑メールフォルダなどに配信されることを防ぐために、kaiin-jastj@jastj.jp を連絡先に登録（ホワイトリストなどに登録）するなどして、確実に受信できるようにしてください。

■ 安心して使っていただくために

このメーリングリストは、誤配信や迷惑メールの配信を防ぐため、メールが会員に配信される前にシステム担当者の承認作業を通してため、迷惑メールが届くことはありません。この承認作業のため、会員の方が会員向けメーリングリストに投稿してから、全員に配送されるまで、数時間のタイムラグがあります。ご了承ください。なお、メールに不備がある場合は別として、内容によって選別するようなことは行っておりませんので、ご安心ください。

メーリングリストに関するご要望やご意見は、担当までメール (system@jastj.jp) でご連絡ください。

(Web編集長 藤田貢崇)

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

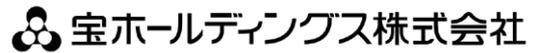
(50音順、2014年6月現在)



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



味の素株式会社



宝ホールディングス株式会社



鷗友学園女子中学高等学校



株式会社東芝



花王株式会社



日本電信電話株式会社



独立行政法人 科学技術振興機構



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



カクタス・コミュニケーションズ株式会社



株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



ロート製薬株式会社



サントリーホールディングス株式会社

賛助会員募集中

■ 新入会員の自己紹介

〈賛助会員〉

- **カクタス・コミュニケーションズ株式会社**
(湯浅 誠、加納 愛)

日本の研究者を対象に、英語学術コミュニケーションのサポートを行っています。日本の研究力低下が指摘されるなか、本気で日本の研究力の向上を目指してサポートしていきたいと思っています。

〈個人会員〉

- **横田 和明** (井之上パブリックリレーションズ)

PR会社に勤務しています。クライアントにIT関係が多く、科学技術への理解を深めて企業広報活動にアドバイスをする時のヒントをつかみたいと思います。

- **清水 和夫** (テクノメディア)

自動車ジャーナリストとして約30年。もとはラリーとレースのプロドライバーでした。ル・マン24時間レースなど海外耐久レースも体験しました。ジャーナリストになってからは、自動車の運動理論や安全・環境技術を専門にしています。

- **都丸 亜希子** (国立医薬品食品衛生研究所)

昨年は思い切って科学ジャーナリスト塾の聴講生になりました。専門家と非専門家をつなぐ何かをしたいと、もう一步踏み出し、入会を希望しました

- **西村 尚子** (フリーランスサイエンスライター)

約10年間、科学雑誌「ニュートン」の編集に携わり、フリーとなった。ネイチャー・アジア・パシフィックの特約記者でもある。2013年からはサイエンス・メディア・センター (SMC) の非常勤スタッフとしても活動しています。

退会

森田政宏、久保田明美、三菱電機株式会社

■ お知らせ

JASTJ設立20周年記念「科学とウィンナ・ワルツの夕べ」

日本科学技術ジャーナリスト会議の設立20周年を祝って、「科学とウィンナ・ワルツの夕べ」を7月1日午後6時30分からプレスセンター10階ホールで催します。

女性4人(ヴァイオリン2〜)で演奏する東京ヨハン・シュトラウス・アンサンブルが出演、シュトラウスの「朝刊」「フィガロ」、ランナーの「宵の明星」など、ワルツやポルカを奏でます。

軽やかな音楽の合間に、JASTJの20年をふりかえり、これからの展望を語り合おうという趣向です。ゲスト出演として、JAXA宇宙科学研究本部の中村正人教授を迎え、宵の明星の最新像や来年、再挑戦することになっている金星探査機「あかつき」の動向について話していただきます。

この20年間には、阪神、東日本の大震災があり、JCO臨界事故、福島原発事故など、科学ジャーナリストにとっても厄介なできごとが相次ぎましたが、この宵は、ひとまず憂さを忘れて、成人になったJASTJを祝いましょう。

軽食、ワインつき、入場無料。会員中心の催しですが、お知り合いも誘い合わせて、お楽しみ下さい。

会員の BOOKS

新刊紹介

光る生物の話

下村脩 (朝日新聞出版・1300円+税・2014年4月)

ノーベル化学賞の下村脩さんが、念願だった「高校生向けの発光生物の入門書」を書き下ろした。朝日新聞出版の編集者山田豊さん(JASTJ会員)の粘り強い働きかけが実ったものだ。ノーベル賞で一躍有名になったオワンクラゲと、ホテルとホテルイカぐらいしか知らない身には、光る生物の多さにまず驚かされる。動物界では少なくとも180科、550属に発光種が含まれているという。それらについて、何がどこまでわかっているのかを説いていく。下村さんが筆を執った背景には、発光生物研究が停滞しているという危機感がある。(JASTJ副会長 高橋真理子)



編集後記

▶2月に続き4月の例会でも特定秘密保護法を取り上げ、今号ではその内容を小出会長が自ら報告しています。中村弁護士の話聞いて思い浮かぶのは、戦前の統帥権問題です。天皇が有する陸海軍の指揮監督権は他の何者も侵すことができないという統帥権を盾に軍官僚は国会審議を封じました。それが軍の暴走を許し、日本を悲惨な戦争に引きずり込む大きな要因になりました。今回の秘密保護法でも、官僚が特定秘密に指定すれば国会の情報開示請求を拒否できる内容になっています。中村さんの話を聞いて、日本の未来を過去に戻してはならないと改めて強く感じています。(鞆)

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館5F
電話・FAX: 03-5689-7191 Email: hello@jastj.jp
会長/小出重幸、事務局長/引野 肇
編集長/高木 鞆生